

おぞましき愛の行方 : The Time of the
Angels論

Yamamoto, Choichi / 山本, 長一

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

2

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

2002-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002873>

おぞましき愛の行方

—The Time of the Angels 論—

山 本 長 一

はじめに

Iris Murdochの第10作目の小説 *The Time of the Angels*¹は、*The Unicorn*や*The Bell*と並んでゴシック的な小説である。また、*The Flight from the Enchanter*にも似て、カリスマの主人公が強力な磁場を形成することは彼女の初期から中期にかけての執筆段階の著しい特徴を示しているうえでも注目すべき作品である。

主人公 Carel Fisher は、「黒い祭司」となって神をも恐れぬ言動により〈限界状況〉の中で周囲の人間を暴力的・性的に呪縛している。Murdochは、この小説で従来のテーマである濃密な限界状況が臨界に達し、核分裂を起こし、やがて崩壊へというプロセスを愛の幻滅のパターンを中心に描いている。その枢軸をなす Carel と彼をめぐる何人かの男女との闘争のてんまつがこの作品のストーリーである。この限界状況が収束するためには巧妙なる「王の死」が不可欠であろう。儀礼的な供犠がどのように成されるのであろうか。その過程での他の作中人物たちの愛の下部構造はいかなる幻滅に変化生成するのか。それは〈他なるもの〉を、また〈欲望〉とリエゾンすることを倦むことなく論じ続けようとする渦巻状のエクリチュールになる危険を冒すことになるのかもしれない。

1. 天使たちの場所

Murdochの小説の中には、ゴシック・ロマンの“loci”が似つかわしいものが多い。この作品の舞台はロンドンの都心に近く、大戦の爪痕が残り、訪れる人としてない霧に閉ざされた牧師館である。このように外部から遮断された館は、都会にありながら *The Unicorn* での中世そのものの隔絶した館を平行移動したセッティングとなっている。例によって、濃密な人間関係の網の

目により液状化現象寸前で崩壊間近の天使たちの聖なる場所が、ソドムとゴモラの町に墮落しつつある。ここは地下鉄の騒音が絶えることなく地獄の様相を呈していて、Carelの弟のMurcusやその友人のNorah Shadox-Brownや兄弟たちのかつての恋人だったAnthea Barlowといった外部の訪問をはねつけて内部に入れようとしなくて、墮天使たちの跋扈する過剰なエネルギーのフォルス場になりつつあることに気付かされる。非理性的なフォルスはCarelに体现されて周囲を汚染してゆく馴致不可能なマグマであって、常に地層の薄い部分を突き破ろうとするディオニュソスの不連続性を有する。備給されえないエクセは消尽されることでしか解消されない。Poeの『アッシャー家の崩壊』での沼に映ずる館を目の前にしたときの主人公が感じた恐怖にも似て、Murcusは「近親相姦」と「父殺し」のオイディプス神話にルーツをたどる〈根源的暴力〉の臭いをかぎとるであろう。地下鉄・霧・蜘蛛、魔墟といった道具立ては恐怖を語るカタログとして充分と言える。

Murcus Fisherは弟Julianの遺児であるElizabethの安否を気づかって牧師館を訪ねるが、「兄に対する、さらに古い恐怖心がいりまじった」感覚はPoeの主人公と同様のものである。Murcusは恐怖にとらえられながらも、兄が深い海から出て来たリヴァイアサンのような化物に変身しているのではないかと、気が狂っているのではないかと、またElizabethを「眠り姫」か「つれなき手弱女」と見なし、義父のCarelによる囚われの身からの救出を目論んで牧師館に侵入しようとする神話・伝説的筋立てをこの小説は採用している。

2. Carelをめぐる人物群

黒い祭司たるCarelは英国国教会の聖職者であるのに、誰とも会おうとせず隠遁者となり、奇行が目立つようになってきた。主人と肉の交わりをもつ黒人の血をひくアイルランド人メイドで「黒い女神」、「反処女」のPattie O'Driscollには、Carelが信仰を失いつつあるように思われ、こう感じていた。

It was in this closeness that Pattie apprehended at last something like a great fear in Carel, a fear which afflicted her with terror and with a kind of nausea. It seemed to her now that, for all his curious solitary gaiety, she had always seen him as a soul in hell. (Murdoch, 32)

彼女は「神を信じるように、彼の信仰を信じてきた」のであるが、「黒い法衣を着た主人の、暗黒の塔のような背の高い、影の深い姿を見上げた」(Murdoch, 34)。彼女はCarelの黒い情婦となり、そのためにCarelの妻Claraは死に追い込まれていたため、Carelの娘Murielとは敵対関係にあった。Murielの視点からは、父が「あの北欧伝説の岩屋に住む巨人のトロール王」であり、「家中の誰もがCarelをいくらか怖れていた」(Murdoch, 35)。このようにしてCarelは彼女にはたえず不安と恐怖を覚えさせる存在としてある。

CarelとMurcusの若死にした弟Julianの娘であったElizabethは、Carelに引きとられて育てられた。だが、Murcusは彼女を少女のころ見かけてから何年も月日がたち、今は19歳の美しい娘になっていることだろうと会ってみたいくなるが、拒絶され会えないでいる。Elizabethは椎間板の不治の病にかかり、コルセットを身につけて館の部屋に閉じこもり、ジグソーパズルとシガーにあけくれ、Carelからはギリシャ、ラテン語を学んでいた。Murielにとって五歳年下の彼女は、「無邪気の極みで、優美な家庭の中心であり、奇妙に侵しがたく、清らかな明るさ」をもち、利発で可愛らしく、従順な成長した妹であった。Carelが「自分の周囲にせつせとつくり出

す暗い訪れる人とてない洞窟然たる環境でElizabethはそこに灯る唯一の光明」(Murdoch, 41)であり、隔離された生活の中でMurielは自分が一時的な生を生きていると感じ、「単純で罪のないもの、盲目的な愛、気兼ねなしの幸福な笑い、通りをうろついている犬たち」(ibid.)といった外部のごく日常的で平凡な生活に憧れていた。王妃然と寝そべっているElizabethの装着しているコルセットを見ることはMurielには許されていなかった。Elizabethは自らを「鉄の乙女」とも言っている。見てはいけないものを見るという〈禁忌〉を犯すことが、やがてこの小説のプロットの転換点になり、臨界に達することに注目しておこう。

やがて、Elizabethの部屋の隣の小部屋の隙間からフランス鏡を使えば覗き見することができると分かる。こういったことから*The Unicorn*の舞台Gazè Castleを彷彿させるgazeとattentionのテーマがこの作品でも顕在化している。*The Unicorn*では囚われのヒロインHannahがアル中になり、部屋中あちこちに鏡があり、それを覗き込んだり、また近くのRiders Castleから救出を試みようとして望遠鏡で覗く男がいるのとアナロジーをなしている。

Unsmiling Muriel still gazed into the mirror as into a magical archway in whose glossy depths one might see suddenly shimmering into form the apparition of a supernatural princess. (Murdoch, 45)

Deborah Johnsonはこういった鏡の部屋やタペストリーなどが、Tennysonの*The Lady of Shallot*と類似点が多いと、またRubin Rovinovitxはイゾルデをそこに見ている。宮廷風恋愛での魅力的なプリンセスの救出、奪取する騎士、“princess lointaine”の主題が散見される。

Murielの視点からは、義妹のElizabethは囚われたものとして見られるが、Muriel自身もこのままでは囚われの身であることを、つまり「シャーロット姫」になっていることを自覚してゆく。彼女はそこからの脱出を考え始めるのであるが、成功するためには「突然の変化の光をあ

てる衝撃」を漠然と夢見るようになる。牧師館の門番に身を貶しているロシアの亡命貴族 Eugene Peshkovとその息子のLeoの存在が、彼女をして外界に目を向かわしめる役目を果たしている。他者への関心・注意 (attention) が enslaveされた状態からの脱出の契機になるという、Murdochのドラマトゥルギーの一つである。このことはMurdoch研究において指摘されていて、Simone WeilやKantの“Achtung”が考えられよう。ただし、この場合は*The Unicorn*や*The Italian Girl, The Bell*のように外部の他者の侵入によるというよりも、境界上の人物群Muriel, Eugene, Leo, Pattieなどむしろ体制内の人物ないしはその周辺の人物に期待がかけられていて、外部のMurcusやBarlow夫人、Norahなどは決定的役割を果たしていない。MurielはLeoをけしかけて騎士の役をさせようと目論む。この館で外界とのつながりがあるのはLeoぐらいである。PattieもCarelの情婦の身から脱するためには、Eugeneに好意をいさぐことでCarelへの視線を転換しようとする。〈主人対奴隷〉の闘争という下剋上の蠢動となる。MurielもEugeneに同じ想いを託そうとする。

Muriel stood at the bottom of the stairs. The house had huddled itself again about the scarcely audible music. She wanted air and motion, running, flight, anything rather than this stillness. She could not think about Carel or about the strange bond which he had seemed to make between them. The existence of her father weighed on her bodily, oppressing her like matter not like thought. She felt loaded and brought to her knees by Carel. If this burden could only slip off her, if some merciful gravity could only release her from it. But the dark image descending had already brought into view its illuminated counterpart, Eugene. (Murdoch, 133-34)

3. 超人 Carel

主人公 Carel は、信仰を失いながら黒い疑惑の教区牧師として牧師館に君臨し、姪（自らの実

子と分かる）の Elizabeth や女中の Pattie と性的関係をもっている。いわば悪徳の栄えなる〈アナテマ〉の体现者として存在している。他方、学校長として外部のノーマルな世界に住む Murcus は、「神なき世界における道德」という仮題で道德の非神話化を企てる哲学的著作にとりかかっている。

Carel は聖職にありながら神を信ぜずにサタンを崇め、「現代は知的な人間が神を信じるのできない時代だ。……神が不在なら誰も恐れることもない」(Murdoch, 79) と弟にうそぶいている。Murcus 自身は、善の理念が行為においては実現が困難なのを考えつつ、兄への恐怖と姪の Elizabeth に危険が迫っていることに暗い気持になる。Carel の言説は、現代においては人間の存在の無意味性、思想面での存在の忘却と故郷喪失を生み、ニヒリズムに移行していることの証左であり、ハイデガーの言う「大地の上に、大地を取り巻いて、世界の暗黒化が生起しているとわれわれは言った。その本質的な出来事とは、神々の逃亡、大地の破壊、人間の集団化、凡庸の優先である」(ハイデガー、『形而上学入門』、理想社、62頁) ことに対応している。最高の理性の神の不在により、関節のはずれた無意味な混沌の世界を出来し、理性は権利に、啓蒙は野蛮に墮し共犯関係を構成、ファシズム、スターリニズム、似非グローバリズム、テロリズムと反テロリズムというふうに果てしなき暴力の連鎖という原初の時代に逆戻りしてしまった。単に「文明の衝突」では語りえない根源的なルサンチマンが潜在しているのではないのか。「理性の腐蝕」は極端な神秘主義やロマン主義の反動を喚起する。Carel の言う「知的な人間」とは神なき時代の無秩序な現代人一般を指しているのであろう。Carel はそれに対し神話化を図ろうとするのであろうか。この神話化という Murdoch が従来からもっているメタフィクションと巧妙な構造的結婚を彼が企図しているのである。理性は神話化に抵抗しながらも、その魅力を振り払うことがきわめて困難である。原初的神話の世界は支配・搾取・権力を運び、〈暴力〉を臍胎しつつ常に時代と歴史の底流にリゾームとなって潜んでいる。

Carelは牧師館にあって、ルシファーとして絶対的暴力と権力を有している。Murdochが「ハイデガーは、サタン自身に他ならない」と言っているように、Carelのハイデガーへの傾倒ぶりはこの小説の中に*Sein und Zeit*が出て来て、PattieがCarelの読みさしを見つけて読み、不安にかられることから分かる。Rabinovitzは、Carelがドイツ実存主義の暗黒の側にとらわれていて、Carel自らが説いている自負・奴隷・近親相姦・自殺といったものを実行に移していると言っている。ハイデガーがニーチェの伝統を継承し、〈善〉という概念に基づく倫理体系に大きな脅威となるので、作者Murdochはハイデガーに対立した考えをもっていると言うのである。また、Murcusも執筆中の「神なき世界における道徳」では、道徳の非神話化を狙い、善なき道徳に危惧を抱いている上に実存主義にも加担しないということになっていて、Carelとは対立する立場である。Norahもアングリカンの主教に対し、英国国教会として常軌を逸した人物に権力を与えておくのは非常に危険であり、当のCarelは狂気じみていてしかも邪悪な男であるから手を打つべきだと迫るが、主教は寛容にみえて、はぐらかしてしまう。NorahもMurcusも神を信じないが、道徳については関心が深い。Murcusは「もしも人間の生活の真実が恐ろしいものであったら？ 考えてみるだけでも破滅を招くような、ぞっとするようなものだったら？」と警鐘を鳴らすのに対して、主教は「そこに信仰が入ってくるのです」(Murdoch, 94)と答える。神への純粋な信仰心を絶対とする教会や聖職者に寛大なのは低教会派にも似ていて、主教は積極的にCarelにアナテマを宣することもなく、すぐに破門しようともしない。

Carelについては、上記のMurdochの言葉をもじれば「Carelはサタン自身に他ならない」のである。ニーチェが『悦ばしい知識』の中で「神は死んだ、われわれはみな神の殺害者なのだ」と言い、神への贖罪しゅくざいの儀式について「われわれが自ら神々にならなければならないのではなからうか？」と言うのは、Carelの先の言葉「神が不在なら僧侶はいっそう必要になる。ミサの間は私が神なのだ」と重なり合う。サタンとして

のCarelは自ら神になってその魔力を発揮しようとする。この作品のタイトルである「天使たちの時」はサタンが墮天使であることから、ハイデガーの*Sein und Zeit*とangelsを連想させるのである。

4. 暴力のミメシス

この小説の時計以前にCarel, Murcus, Julianの三兄弟間にAnthea Barlowをめぐる闘争があり、Julianは死に、この闘争はElizabethをめぐる闘争として二人の兄弟に残されていて、過去に相互暴力が存在したということに注目すべきである。カラマーゾフの兄弟にも似たこの兄弟間の闘争はJulianの死を招き、やがて小説の結末での最高の暴力であるCarelの死によって〈オブジェクション（おぞましい状況）〉の終焉となる筋立てをとっている。

一方、亡命ロシア貴族で、強制収容所での過酷な体験をもつ、いわば集団的暴力の犠牲者であるEngeneの最も大切にしていたアイコンには、三人の天使が描かれていて聖なる三位一体を表している。この聖なる天使たちの時と、牧師館の俗なる天使たちの時は、コントラストと言うべきか合わせ鏡のシミュラクルとなっている。そして、それぞれ閉ざされた世界と外の世界との差異を際立たせている。神なき無秩序の俗なる牧師館での墮天使たちの跳梁と、ロシア正教の聖なる失われた世界の異人との対照の妙は天使が本来具有する両義性を語っている。この象徴的なアイコンは、Leoによって盗まれ売られてしまう。やがてMurcusにより買い戻されるが、この一時的な父なる神の神隠しはこの地での儀礼の危機を暗示してはいまいか。さらにCarelと実の娘であるElizabethとの近親相姦の場をMurielが目撃する事態は、アジア的ディオニュソスのオルギアへと加速することの予兆である。

Carelは「最高善である神の死が恐るべき天使たちを解放した、そしてこの天使たちは人間を餌食にする存在だ、善も不可能だし、われわれは道徳よりも運命に支配されていて、われわれにとって唯一の現実はわれわれが帰ってゆく不気味な存在の子宮だけだ」(Murdoch, chap. 17)とMurcusに言う。エホバヤリヴァイアサンの世

界においては人間は無益な存在で、大衆化と畜群道徳のこの世界は無意味だとも言う。ニーチェの運命・悲劇の世界に通底していて、Murcusの属する善や道徳の存在する世界とは相容れないものであり、さらに彼は兄に「あなたは狂っている」と言うと、Carelに暴力をもって牧師館から排除されてしまう。Carelは、「虚無を祭壇に置き、虚無のために神を犠牲にする」(『善悪の彼岸』)という「最後の残忍であるこの逆説的秘儀」を自ら実践しようとするのである。理性の伝統を是とするMurcusと、「力への意志」を崇めるCarelは水と油の関係でしかないことが明らかである。Carelは生とは搾取であり、支配であるということから、欺瞞的な理想主義や神の世界に与しない。自らが育った西欧市民社会の価値感を呪うことは自分自身を葬ることにものなる。自己同一性すら抹殺して、いっさいが永遠回帰するのであろうか。これはニーチェの思想の根幹である。人は生まれ変わるのではない。とすると、現状で幸福でないものは未来でも幸福ではないことになる。死しても永遠に^{つら}苦は繰り返されるのであろう。人は永遠に^{つら}旧廬に戻ってくるのか。「何せうぞ くすんで 一期は夢よ ただ狂へ」(『閑吟集』)である。Carelは狂人であり、分裂者でもあるだろうが、このことはわれわれ現代に生きる者を根源から揺す振り続けてやまない。

フロムによれば、「生を破壊するには唯一の特性一力の使用が必要なのだ」ということになる。他者や自分の生を破壊して生を超越することができるというのである。CarelはPattieやElizabethに対し、また間接的にMuriel, Eugene, Murcusに権力を振う。過去においてJulianに対してもそうであった。Carelは自ら神になろうとするが、なり得るわけがないし、動物にもなり得ない。ただ「悪」の化身になるのである。フロムによれば「悪」とは、特別に〈人間的〉現象であると同時に悲劇的である。CarelはMurcusに「悪のみが現実だ」と言う。

Pattieは「生半可なことでは愛などとは呼べないような恐ろしい絆によってCarelと結ばれていて、彼女はCarelであった」(Murdoch, 153)。またMurielも「父は彼女自身の一部になりきって

いる」と言って、Elizabeth同様Carelにマインドコントロールされ、ミメシスに汚染され、伝染してゆく。しかも父と娘の近親相姦の場を目撃するという「見てはいけない、知ってはいけない」タブーを犯してしまったのである。PattieもMurielも自由を求めて生のベクトルをEugeneに向けてゆこうとする。MurielはElizabethを連れて牧師館を脱しようとCarelに宣言するが、彼はMurielだけを追い出そうとする。Carelの実の娘だと分かったElizabethの悪のミメシス、共犯関係にMurielはがく然とする。Murcusが買い戻してCarelの元へ返したEugeneのアイコンをめぐって、MurielとPattieは恋の鞆当てをし合い、暴力を振り合う。こういった暴力のミメシスは、Murielを犯そうとするLeoにも伝染するほどである。

5. 愛の契機

こういったオブジェクトとしてのCarelは恐ろしくも魅力的な、いわばメドゥーサの両義性を有していて、周囲の集団の秩序を脅かす存在であるがゆえに抑圧・排除される運命にある。宗教は神話時代から連綿として宗教儀礼によって〈汚れ〉をく穢れへとサクレしてきた。集団の崩壊と解放、そのためにCarelの死は儀礼的にも必要とされる。またPattieはElizabethに幼児のころから愛情を覚えていたが、Carelとのインセストのことには耐えられないという手紙を書き置きし、それを読んだCarelは睡眠薬自殺を図る。この行為はソクラテスが毒をあおいで自殺したのに似ている。既存の価値・秩序への根源的批判者、かつまた伝統により排除される犠牲者がこういった〈パルマコン〉的存在者である。すなわち、マージナル・マンとしてCarelのようなカリスマ性を有するものも含まれるのである。睡眠薬というパルマコンは魅惑と死の両義性を持ち、それをあおることでCarelは自らの生命を断ち、呪われた者として永遠回帰の連続へと変身する。

この小説には、Carelを中心とするおぞましい状況(オブジェクション)の中にも、パタイユの言うように他の人物たちが自覚に向かう契機がある。19章でMurcusが兄に殴られた一撃、つ

まり暴力が兄への愛を啓発するものとなったからである。Murdochの小説では、ある現象が契機となり、愛の認識や幻滅が突然に自覚されることがよく見られる。暴力のミメシスが、アドルノの言う人間と人間、人間と自分自身とが宥和するミメシスへと昇華されたのである。相手への合一、同化という愛の救済である。〈力への意志〉による相手を支配せんがための認識でない認識、暴力による超越でなく愛による超越を人は維持する能力を有しているのであろう。人は本来孤独である。ひとりで生まれて、ひとりで死ぬ。不連続の個体が、たとえつかの間であるとしても、愛によって自らの存在の無意味性を埋め、自ら投企によって欠落した半分(相手)を求めようとする。たとえそれがシジフォスの甲斐なき労苦であろうとも。

結びにかえて

Murielが、恐怖の対象であったCarelの自殺を止めることができなかつたのは、おぞましい愛を実践する父から解放されたいからであろうか。彼女は初めてCarelの死か生かへの決定権を握ったのである。最高の暴力である死を選択してやることに父の〈力への意志〉を認めようとした。ここには神もキリストも存在せず、投げ出された全くの裸形の孤独な即自存在としてあるだけである。ルシファーとして地獄に墮ちる父を死なせたのちに、自ら父を愛していることを自覚することになる。Murielの場合も父の死という契機によって愛の存在を認識することになる。さらに彼女は、「素朴な愛や、とらわれぬ幸福な笑い、街の中を歩いている犬、そういった単純で無垢な世界からの永久の訣別を宣告されてしまった」という「閉じ込められた愛」であったと自覚するほど成長を遂げたことになる。Murielは暴力の汚染を食い止めるべく〈父殺し〉の罪を犯しつつも、Carelを見殺しにするという第三項の排除を執行したのである。王は殺されなければならない。集団の〈汚れ〉を一身に背負って。

かつてCarelに呪縛されていた人物たちも次々と主なき牧師館を去ってゆく。「カラマーゾフの兄弟」のMurcusは、兄の死によって未完の哲学

論文「神なき世界における道德」もCarelの「黒い哲学」には対抗できないと知り、兄の〈力への意志〉も情熱も、Murcus自身の反省も最高の暴力の死を前にしては無力であることを知る。シジフォスの終りなき労苦を知りながらも孤独な群衆は、つかの間の合一によって慰められるべき〈愛〉というアモルフォスな現象のコミュニケーションを企図し、パタイユの言う〈呪われた部分〉をgazeすることにより、個々の人間が共生できる可能性を示錯することでこの小説は終わっている。

〈注〉

1. Iris Murdoch, *The Time of the Angels* (Harmondsworth: Penguin Books, 1968). ただし初版は (London: Chatto & Windus, 1966). 以下、引用は (Murdoch) と略す。

〈参考文献〉

1. Gerstenberger, Donna. *Iris Murdoch*. New Jersey: Associated U. Press, 1975.
2. Johnson, Deborah. *Iris Murdoch*. Brighton: The Harvester Press, 1987.
3. Rabinovitz, Rubin. *Iris Murdoch*. New York & London: Columbia U. Press, 1968.
4. Todd, Richard. *Iris Murdoch*. London & New York: Methuen, 1984.
5. シモーヌ・ヴェイユ『ヴェーユの哲学講義』(渡辺一民・川村孝則訳、筑摩書房、1996年)
6. ジョルジュ・パタイユ『エロティシズム』(洪澤龍彦訳、二見書房、1973年)
7. ———、『呪われた部分』(生田耕作訳、二見書房、1973年)
8. エマニュエル・レヴィナス『暴力と聖性——レヴィナスは語る』(内田樹訳、国文社、1991年)
9. ルネ・ジラルール『暴力と聖なるもの』(古田幸男訳、法政大学出版局、1982年)
10. エーリッヒ・フロム『愛するということ』(鈴木晶訳、紀伊国屋書店、1991年)
11. ———、『悪について』(鈴木重吉訳、紀伊国屋書店、1965年)
12. 今村仁司『暴力のオントロジー』(勁草書

房、1982年)

13. ———、『排除の構造』(青土社、1985年)
14. 山崎庸佑『ニーチェ』(講談社学術文庫、1996年)
15. J.デリダ他『ニーチェは、今日?』(筑摩書房、2002年)
16. F.ニーチェ『ニーチェ全集』(筑摩書房)
17. M.ハイデッガー『存在と時間上・下』(細谷貞雄訳、筑摩書房、1994年)
18. 三島憲一『ニーチェ』(岩波新書、1987年)